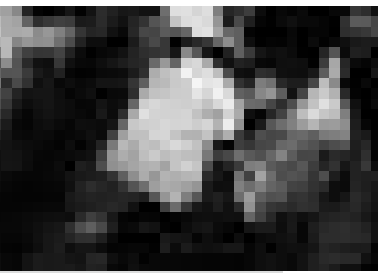
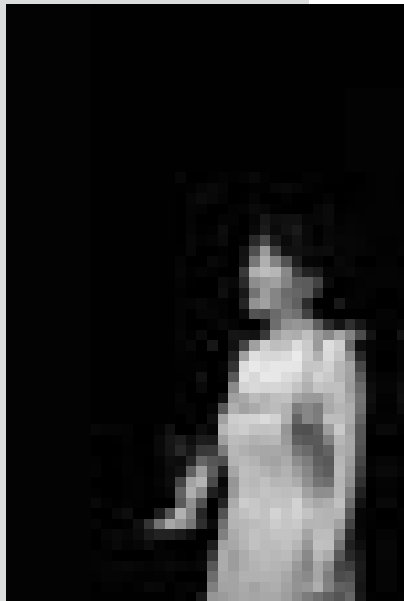
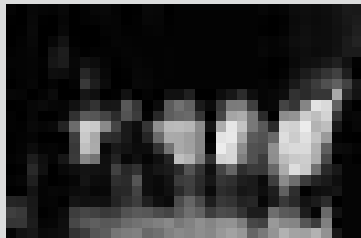
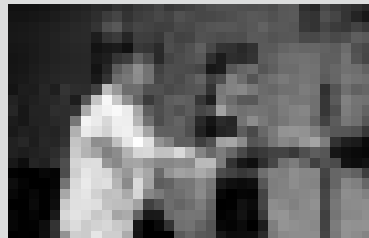
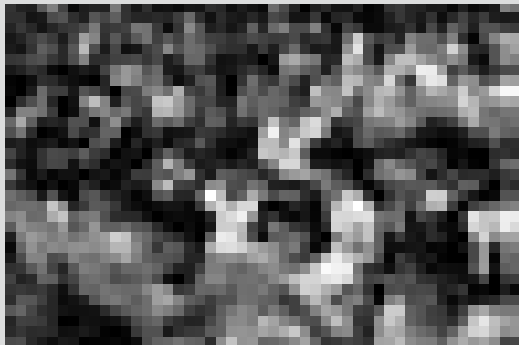
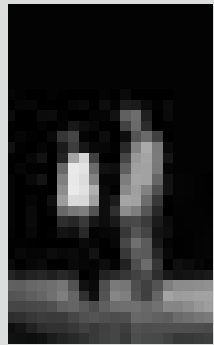


童謡祭り Douyoumaturi



市内のコーラスが好きな子どもたちが集まり、昨年2月に結成されたAJCあづみのジュニアコーラス。新作愛唱歌「やさしいあづみの」、「7つの子」を歌いました。

第27回作詞作曲コンクールでは、最優秀賞に豊科南小4年の中楨亜依さん、宮瀬百紅さんの作品「3年2組の出来事」が選ばれ、クラスメートとともに曲を披露（写真左下、中央下）。また、優秀賞には、三郷中1年の唐木泉さん、由井智也くんの作品「虹色の笑顔」が選ばれました（写真左上）。招待演奏会の第2部では、声楽家の幅谷恵理さんが、童謡を歌うことで日本の四季をたどりました（写真右）。



すべての子どもたちへ

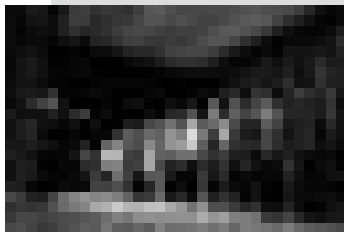
5月5日の「こどもの日」は、安曇野の音楽史にとっても、記念すべき日だといえます。

今から44年前の同日、豊科出身の文学者・藤森秀夫を顕彰する記念碑が、現在の近代美術館の敷地内に建てられました。それ以降、旧・豊科町では、毎年5月5日に「童謡祭り」を開催し、藤森秀夫をしのぶと同時に、子どもたちの音楽性をはぐくんできました。

今年は、小中学生の作詞作曲コンクールや発表の対象を市全域の小中学生に広げました。この日は、家族連れなど約400人が参加。藤森の三女、佐野秀穂さんの伴奏により、全員で「めえめえ児山羊」を合唱しました。

同実行委員会会長の山本紘子さんは、「安曇野の自然の中で育った子どもたちは、感性の宝庫。それを引き出す機会となれば」と期待を寄せます。

童謡祭りは、子どもたちばかりでなく、音楽愛好家が集い、歌うことの喜びを分かち合っています。豊科地域内のコーラスグループ（写真右）と、市内に4つある「童謡唱歌をうたう会」（写真左）の有志で結成したグループが歌声を響かせました。



早春賦 Sousyunfu

希望の春、海を越えて

「人生の春を待つ心。この詩にはそんな意味も込められている」。そう語るのは、「早春賦」の作詞者・吉丸一昌（かしまさ）の孫である昌昭さん。

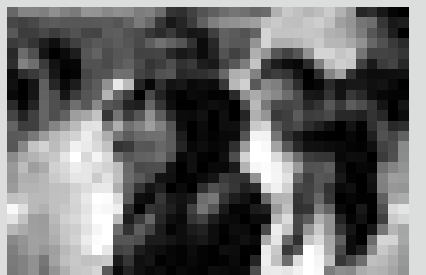
昌昭さんは昨年、早春賦をテーマにしたドキュメンタリー映画「二つの故国をつなぐ歌」Div a 早春賦をうたう」を制作しました。この映画では、昌昭さんのところで、インドネシア・スマトラ島在住のサクラ・ナルカヤさんと孫のディーバさんが登場し、サクラさんの半生と早春賦の心が描かれました。

サクラさんは、戦時中にスマト



4月から5月にかけては、早春賦にかかわるイベントが数多く開かれます。4月29日には、第25回早春賦まつりが穂高川沿いの歌碑前で開かれ、早春賦の合唱やインディアンハープの演奏などが行われました。

サクラさん(左)とディーバさん(右)



春の歌声響く。♪#

まるで、鳥のさえずりが一斉に響き渡るように――。

安曇野の春が題材になったといわれる「早春賦」。

そして、安曇野が生んだ文学者・藤森秀夫が作詞した「めえめえ児山羊（こやぎ）」。

郷土を代表する2つの唱歌がそれぞれの音色を奏でました。

